

大学生を対象とした災害報道版クロスロードの試行

Potentiality of the Disaster Reporting Version of “Crossroads”
in Disaster Risk Reduction Education for University Students

関西大学社会安全学部

近藤 誠司

Faculty of Societal Safety Sciences,
Kansai University
Seiji KONDO

関西大学大学院社会安全学研究科

岩本 乃蒼

Graduate School of Societal Safety Sciences,
Kansai University
Noa IWAMOTO

SUMMARY

Despite the fact that troubles surrounding disaster reporting have occurred one after another in Japan, where natural disasters occur frequently, there is a lack of accumulated knowledge to mitigate these problems. Therefore, in this study, the disaster reporting version of “Crossroads” will be developed to bridge the “reality gap” between news reporters and non-news reporters. This paper will report the results of the trial (FY 2015, 2021, and 2023) targeting university students.

Key word

Disaster Risk Reduction Education, the Disaster Reporting Version of “Crossroads”, Risk Communication, Reality Gap

1. 問題意識

自然災害が頻発化する日本社会において、災害報道をめぐるトラブル（報道災害）が繰り返し発生している。たとえば、ひとつの現場に数多くの報道機関が押し寄せたり、避難所等でプライバシーを侵害するような撮影が行われたり、被災者を傷つける心無いインタビューがなされたりした事案が相次いで報告されている[1]。

このような問題を軽減化するために、報道機関の組織内部では、報道従事者を対象

とした研修や訓練等が実施されているが、未だ根本的な解決には至っていない。

ところで、災害報道をめぐるトラブルのなかには、現場対応のありかたを一意命題の形式で——すなわち、「A の場合は B せよ」、「C の場合には D するな」等——マニュアル化しておくことが困難な状況が数多く含まれている。たとえば、発災直後、被害が甚大な現場に急行した記者が、救助活動を手伝うべきか、それとも取材に徹するべきかといったジレンマである。このような場

合、人道上は手伝うべきだと考える人も多いことだろう。しかし、職務遂行上は取材を敢行すべきだとする考えかたもあり得る。実際の現場では、救助に手を貸さないことに腹を立てる市民もいるだろうし、無理に手伝おうとして、かえって迷惑をかけてしまうケースもあるだろう。過去の経験談を採取してみると、救助した／しない、いずれのパターンも見出すことができる。そして多くの場合、当事者からは後悔の念が語られており、部外者からは非難の言葉が浴びせかけられている。

トラブルに至る深刻なジレンマを克服するためには、報道従事者と非報道従事者の互いが見ている＜世界＞の違い——これを、「リアリティ・ギャップ」と呼ぶ[2]——を重ね合わせて、あらかじめ折り合いを付けておくことが求められる。そのために開発

されたツールが、「災害報道版クロスロード」である[3]。

「クロスロード」とは、阪神・淡路大震災を契機として生まれたコミュニケーション・ゲームのことである[4]。このツールは、実際に生じたジレンマ状況の経験談をふまえて、プレイヤーたちが、我が身に引き寄せて“考える道筋”を追体験することができる。防災の領域では、行政職員の研修や市民の普及啓発活動等に活用されており、その他、医療・看護・福祉・環境・まちづくりなどの領域にも広がってきている。

「災害報道版クロスロード」は、これまでに、おもに現役の報道従事者を対象として試行されてきた[5]が、市民（非報道従事者）のメディア・リテラシーを高める際に力を発揮する可能性があることも、すでに指摘されていた[1]。

表-1 災害報道版クロスロード精選 10 問[1]

災害報道版クロスロード精選10問			
設問	局面	内 容	
1	緊急時	あなたは、記者です。大地震が発生。被災した現場に急行すると、がれきの中から助けを求める声がする。取材を優先する？	
2	緊急時	あなたは、TVディレクター。大地震が発生。被災した現場で生中継を担当することに。夜、照明を使っていると、被災者が捜索活動に貸してほしいという。機材を貸す？	
3	緊急時	あなたは、記者です。大地震が発生。津波で同僚が行方不明になった。被災地では、取材の手が全く足りない状況が続いている。それでも同僚を探す？	
4	緊急時	あなたは、TVの解説委員です。放送中に大地震が発生。大津波警報も発表された。天気カメラの映像を見る限り、まだ津波を確認することができないが、それでも強い口調で、「高台に逃げてください」と注意喚起する？	
5	緊急時	あなたは、沿岸部の駐在記者です。大地震が発生。大津波警報が発表された。このような場合、まず水門をしめる消防団員の様子を撮影・取材することが基本となっている。水門に向かう？	
6	緊急時	あなたは、新聞社のカメラマンです。地震の被災地で病院取材をすることに。しかし、入口には「メディアはお断り」の貼り紙があった。それでも、取材する？	
7	緊急時	あなたは、TVのカメラマンです。沿岸部で取材中、巨大地震が発生。避難した高台から見下ろすと、人が津波で流されている。撮影する？	
8	緊急時	あなたは、TVの映像編集担当。巨大地震が発生、来襲した津波によって人が流されている様子を、たまたま現場にいたカメラマンが撮影して持ち帰ってきた。この映像を使う？	
9	平常時	あなたは、TVのプロデューサーです。取材ディレクターが、津波被害の遺族から、亡くなった肉親の遺体の写真を借りてきた。防災啓発のため、遺族自身がオンエアを希望しているという。番組で使う？	
10	復旧期	あなたは、TVディレクターです。大地震が発生。1週間連日、被災地のリポートばかりが続いているなか、「次の巨大地震に備えて」という防災特番の企画が持ち上がった。賛成する？	

そこで、本研究では、第一筆者が 2014 年度に開発した「災害報道版クロスロード(精選 10 問)」(表-1)を大学生に体験してもらい、当該ツールにどのようなポテンシャルティがあるのか確かめることにした。

2. 対象と方法

本調査の対象者は、関西大学社会安全学部に所属する大学生(おもに 2 年次生)である。第一筆者が担当する「災害情報論」を履修する学生に対して、2015 年度はワークシートに記入する対面方式で、2021 年度は Google フォームに入力するオンライン方式で、そして 2023 年度は再びワークシートに記入する対面方式で回答を求め、データを採取した(表-2)。

表-2 調査対象者リスト

2015年度	災害情報論履修者	285名	対面
2021年度	災害情報論履修者	141名	ウェブ
2023年度	災害情報論履修者	265名	対面

3. 結果

以下、大学生の Yes/No の回答傾向、報道従事者と大学生の回答傾向の比較、大学生のクロスノート(後述する)の分析、そして、大学生が受けたインパクトの分析の順に報告する。

3.1 大学生の Yes/No の回答傾向

「災害報道版クロスロード精選 10 問」のジレンマ状況に対する縦断的な試行の結果(Yes/No の回答分布)は、図-1～図-10 のとおりとなった。

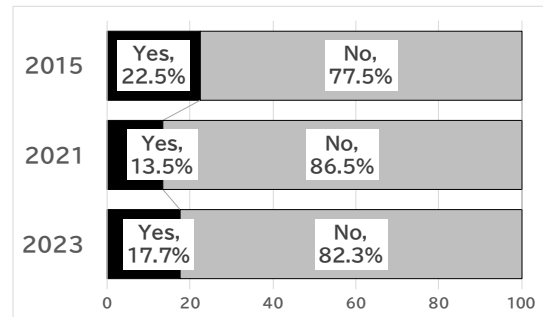


図-1 設問 1 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

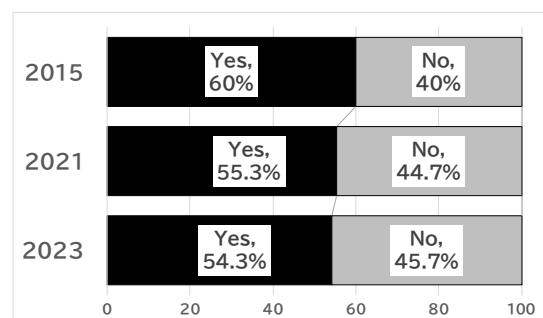


図-2 設問 2 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

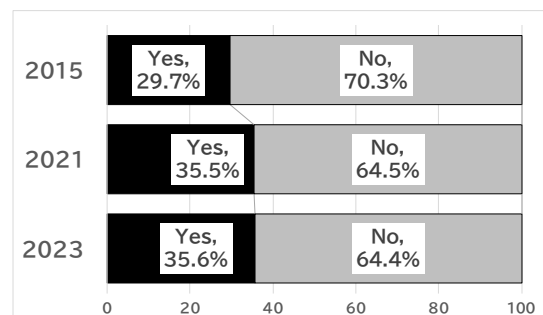


図-3 設問 3 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

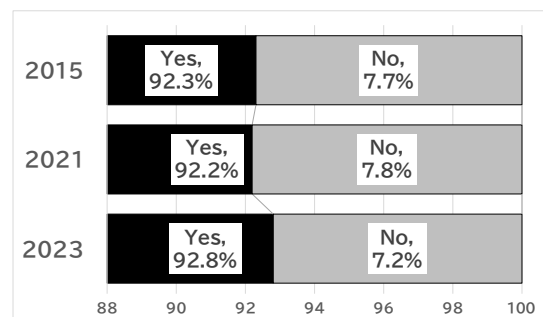


図-4 設問 4 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

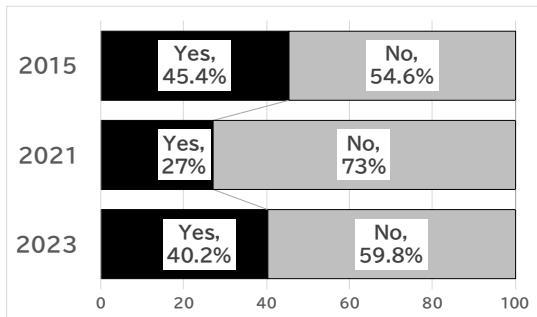


図-5 設問 5 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

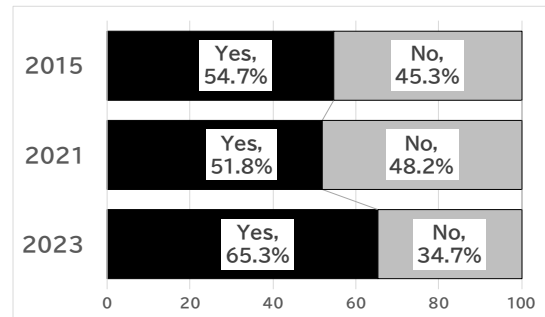


図-9 設問 9 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

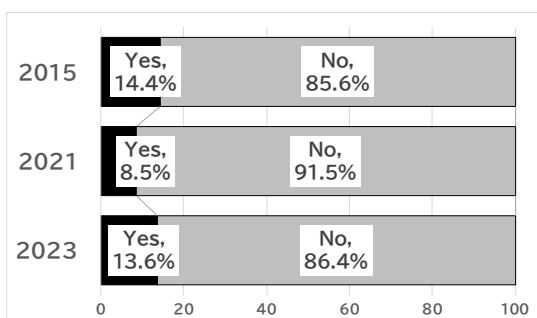


図-6 設問 6 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

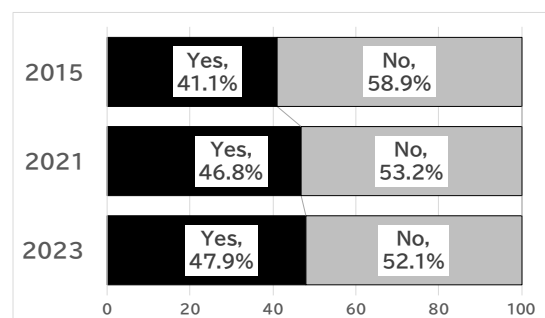


図-10 設問 10 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

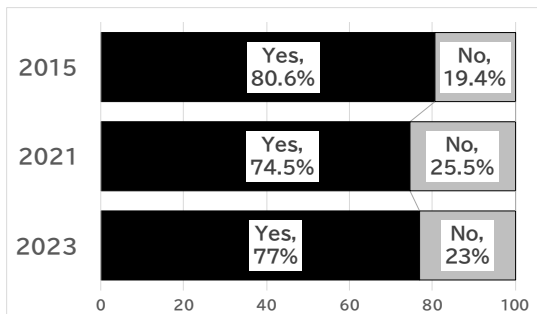


図-7 設問 7 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

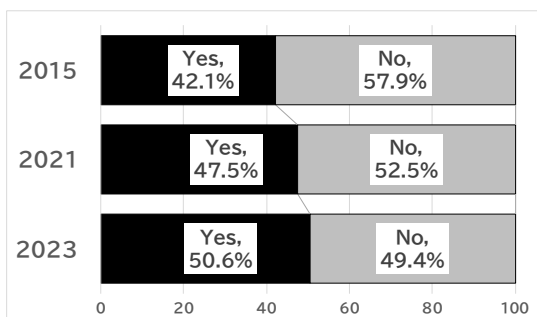


図-8 設問 8 の Yes/No 分布 (3 年度比較)

「災害報道版クロスロード精選 10 問」の結果を通覧すると、比較した各年度で多数派・少数派が逆転するような差異は見当たらなかった。Yes の比率が一様に増え続けている／減り続けている（ように見える）設問もあるが、手持ちのデータだけでは、潜在的な変数を類推することは困難である。

ところで、設問 5（「大津波警報が出た際、水門をしめる消防団員の様子を撮影に行くか」）の各年度間の比率には、統計的に有意な差があった（ $\chi^2(2)=7.674999$, $p<.05$ ）。2021 年度の回答結果に、何らかの理由で偏りが生じた可能性がある。ウェブ調査による“ぶれ”なのかもしれないが、設問 5 だけが大きく変容したことの説明が付かず、残念ながら原因は不明のままである。

3.2 報道従事者と大学生の比較

「災害報道クロスロード精選 10 問」に関して、2015 年度、2021 年度、2023 年度の回答データを合併して、平均スコアを算出した。ただし、設問 5 に関しては、2015 年度と 2023 年度のみ使用した。

そして、大学生の平均スコアを、2019 年度に第一筆者が実施した日本記者クラブにおける現役記者（n=83）のクロスロード・プレイの回答データと比較した。

その結果を、表-3 に示す。どの設問の YES/NO 比率も、先行研究が示す知見[1]と大略同じ傾向であったことが確認された。

表-3 報道従事者と非報道従事者の回答比較

YES/NOの選択数が多い側(割合)		
設問	報道従事者	大学生平均
1	NO (83.1%)	NO (81.2%)
2	NO (54.2%)	YES (56.9%)
3	NO (79.5%)	NO (66.9%)
4	YES (98.8%)	YES (92.5%)
5	NO (68.7%)	NO (57.1%)
6	YES (66.3%)	NO (87.1%)
7	YES (90.4%)	YES (78.0%)
8	NO (85.5%)	NO (53.5%)
9	NO (83.1%)	YES (58.2%)
10	NO (60.2%)	NO (55.1%)

15 ポイント超の差がある場合には四角で囲い、多数派が逆転している場合には灰色で強調した

3.3 大学生のクロスノート分析

2021 年度の調査では、学生が Yes/No の理由や条件・補足などをメモした「クロスノート」[4]をデジタル・テキストデータの

かたちで保存・採取することができた。そこで、このデータを生成 AI の Microsoft Copilot を使って全文要約したところ、Yes/No、それぞれの考えに紐づいた重要な論点を抽出することができた。

ここでは、一例として設問 9 の「クロスノート」の要点を掲載する（表-4、表-5）。設問の内容は、「あなたは TV のプロデューサーです。取材ディレクターが津波被害の遺族から亡くなった肉親の遺体の写真を借りてきた。防災啓発のため、遺族自身がオンエアを希望している。番組で使う？」である。東日本大震災時の実話から作成した設問で、これまでのクロスロード・プレイでは、意見が分かれやすいジレンマであることがわかっている[2]。

生成 AI が抽出した Yes/No のクロスノートの要点は、報道従事者が判断する観点[1]と重なるものが多く、内容には迫真性があるものが並んでいた。

また、原文を参照すると、同一観点から異なる意見にたどりついているケースも散見され、ジレンマの根深さを確認することができた。たとえば、“遺族ファースト”という考えを出発点にしながら、遺族のプライバシーを守るためには遺体画像を防災の普及啓発に使うべきでないとする意見がある一方で、遺族が強く願うからこそ、同じ悲劇を繰り返さないように、敢えて遺体画像を使うべきだとする意見があった。

確かに、社会安全学部生——しかも、「災害情報論」の履修者——という特殊な集団から採取した、ごく限られたサンプルの分析ではあるが、報道従事者のみならず若者（非報道従事者）でも共通した葛藤を抱え得ることを端的に示す結果となった。

表-4 災害報道版クロスロード 設問9のクロスノートの要点（Yesの意見）

YESのコメント

-
- 1: リアルな状況の伝達:
遺族の許可を得ており、リアルな状況を伝えることができる。
 - 2: 上の立場の指示:
上司からの指示があるならば、その方法も模索する
 - 3: 情報のオーナーシップ:
リアルな情報を視聴者に提供すれば「我が事」に感じるはず。
 - 4: 遺族の希望:
遺族が希望しているため、使用する。
 - 5: 防災啓発:
防災啓発のために使用する。鉄は熱いうちに打て。
 - 6: モザイク処理:
遺体の写真はモザイク処理を施して使用する。
 - 7: 視聴者への配慮:
視聴者に対して事前に警告を行ってから放映すればよい。
 - 8: 防災意識の向上:
災害の現実を伝えることで、防災意識を高める。
-

表-5 災害報道版クロスロード 設問9のクロスノートの要点（Noの意見）

NOのコメント

-
- 1: 視聴者の反応:
遺族が希望していても、視聴者の捉え方が様々であり、不快に思う人もいる。
 - 2: 他の被災者への配慮:
他の被災者が見ることで、辛い記憶を思い出させてしまう可能性がある。
 - 3: ショッキングな内容:
生々しくショッキングな映像は、防災啓発には適さないと考える。
 - 4: 代替手段:
遺体の写真を使わずに、CGやイラストで説明する方法を検討する。
 - 5: 倫理的な問題:
遺族の希望があっても、倫理的に放送するのは問題があると考ええる。
 - 6: 視聴者への影響:
遺体の写真が視聴者にショックを与え、精神的な影響を及ぼす可能性がある。
 - 7: 防災啓発の方法:
遺体の写真を使わなくても、防災啓発は可能であると考ええる。
 - 8: 放送コンプライアンス:
テレビの放送コンプライアンスに反するため、遺体の写真は使用しない。
-

3.4 大学生のインパクト分析

先述したとおり、2021 年度は Google フォームを活用したウェブアンケート方式で「災害報道版クロスロード精選 10 問」を実施した。その際に、設問の最後に、「今回の授業で学んだことを書いてください」という自由記述欄を設けていたことから、リアクションペーパーに類するデジタル・テキストデータを収集することができた。

総文字数は 22,754 字で、平均すれば 1 人 160 字ほどであった。

コンパクトなサイズのデータではあるが、大学生が当該ツールからどのようなインパクトを受けたのか知る手掛かりになる。そこで、回答者全員分のテキストを合併・成形したのち、生成 AI の Microsoft Copilot に数種のコマンドを入れて、共通した要素を網羅的に抽出するようにした（表-5）。

表-5 リアクションペーパーに類するデジタル・テキストデータの内容分析

【1】葛藤と困難な判断

- ・災害現場での葛藤と正しい判断の難しさを痛感
- ・記者の立場での取材や撮影の決断が難しい

【2】災害報道の難しさ

- ・取材現場でリアリティを求めると視聴者への配慮のバランスが難しい
- ・被災者の気持ちに寄り添いながら情報を伝えることの重要性

【3】メディアの役割と倫理観

- ・メディアの役割、プライバシー、倫理観の間での葛藤
- ・リアルな情報を伝えることと視聴者の反応や非難のバランスを考える必要性

【4】災害報道の影響

- ・被災地での取材が精神的に影響を与えることを理解
- ・正しい報道のために事前の準備と知識の重要性を認識

【5】報道と人道的対応

- ・情報を伝える重要性和被災者への人道的な対応の両立の難しさ
- ・被災者のプライバシーや心理的ケアの知識を持つことの重要性

【6】災害時の判断と行動

- ・災害時の判断が難しく、現場では即座の決断が求められる
- ・事前のルール設定や準備が重要

【7】災害対応のジレンマ

- ・判断に迫られる場面が多く、実際の状況では迷いや葛藤が生じる
- ・各立場からの視点を考慮する必要がある

【8】防災意識の向上

- ・一人一人が防災について知識と関心を持つことが重要
- ・より良い判断ができる人を増やす活動が必要

最終的には8つのカテゴリーに統合することができた。グループ【1】～【5】には、やや重複した内容も含まれているように見えるが、大略としては、大学生は災害報道をめぐる葛藤の根深さをしっかり学び取ることができていたことを示す結果となった。そして、報道従事者（メディア）に要請されるであろう素養——たとえば、心理的ケアの知識や倫理観、報道が社会に与える影響に対する深い理解——に関しても、大学生なりに認識しているようであった。

一方、グループ【6】～【8】には、災害報道に限らず、災害対応全般にかかわる重要な項目が挙げられていた。大学生にとってみれば、「（災害時には）判断に迫られる場面が多く、実際の状況では迷いや葛藤が生じる」ケースがあることを知る良い機会となったようである。将来、このことを肝に銘じておけば、同様・類似の状況に遭遇した際に、冷静に対処することができる可能性がある。

また、ジレンマ状況に対しては、「各立場（ママ）からの視点を考慮する必要がある」という点や、「一人ひとりが防災についての知識と関心を持つことが重要である」という点、さらに、「より良い判断ができる人を増やす活動が必要」といった俯瞰的な要点が抽出されており、今回の「災害報道版クロスロード」の試行が、我が身に引き寄せた深い学びにつながった可能性があることが示唆される結果となった。

4. まとめ

災害報道をめぐっては、報道従事者と非報道従事者の間で“コミュニケーション・リスク”を統御し合い、“リアリティ・ギャ

ップ”の溝を埋めていくうえで、本研究が照準した「災害報道版クロスロード」には一定のアドバンテージがあるものと考えられる。今後は、さらに試行を繰り返し、異なる集団間の横断的な比較・検討をしたり、同一集団内の縦断的なデータを蓄積したりすることによって、より確かな知見を抽出し、十全なリスク・コミュニケーションが具現化できるように寄与していきたいと考えている。

参考文献

- [1] 近藤誠司（2022）「災害情報とリアリティ ——情報学の新たな地平」，関西大学出版部。
- [2] 近藤誠司（2024）「災害情報学の挑戦 ——無限の可能性を拓く」，関西大学出版部。
- [3] 近藤誠司（2014）災害報道従事者が直面するジレンマ ——災害報道版クロスロードの作成，日本災害情報学会第16回学会大会予稿集，pp. 160-161。
- [4] 矢守克也・吉川肇子・網代 剛（2005）「防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション クロスロードへの招待」，ナカニシヤ出版。
- [5] 近藤誠司（2023）「コロナ禍と社会情報 ——インフォデミックの考現学」，関西大学出版部。

（原稿受付日：2024年12月16日）

（掲載決定日：2024年12月24日）